

令和7年度 鈴鹿市立飯野小学校 関係者評価書

* 評価は、1:十分にできている 2:概ねできている 3:どちらかというとできていない 4:できていないの4段階評価（各指標の数値については、小数第2位で四捨五入）

評価項目	本年度の活動と指標	達成状況【アンケート6.12→R7.12】	評価	(R7) 成果と課題(◎成果、▲課題)	(R7) 学校関係者評価	(R7) 来年度に向けた改善点
（確かな学力の育成）	① 主体的・協動的な授業の展開(自分の思ったことや考えたことを進んで書いたり、発表したりする:75%以上)(勉強が分かる:80%以上) ② 「よむYOMUワークシート」等を活用した学習(全国学調:全国比100%以上) ③ 「授業力UP5Ⅱ★」を意識した授業の推進 ④ ICTを活用した授業・家庭学習の推進 ⑤ 読書習慣と読書力の定着(読書に進んで取り組んでいる:80%以上) ⑥ 学習ボランティアの活用と支援内容の充実 ⑦ 家庭学習の充実(家庭学習10～15分×学年:保護者評価80%以上)	①[(児童)進んで発表する:74→75]【勉強はわかるか:91→87】 ②読む書くワークシート、よむYOMUワークシートの活用。みえスタディチェックの過去問の活用。 ・学調結果(R7年度:全国との差 国語-4.8 算数-4.0 理科-4.1) ・学調結果を分析、具体的対応策を実施 ・R7年度5年生第1回みえスタディチェック結果(県との差: 国語-1.3 算数+0.2 理科-4.6) ・学調分析結果を保護者、学校運営協議会に公表 ③研修理念について文書化し、職員で共有 ・各学年部の校内授業公開、「授業力UP5Ⅱ★」の観点に基づいた事後検討会の実施 ・校内研修会で、学年間の系統性を意識した教材研究 ④ICT端末の日常的な活用 ・オクリングプラス(作文、意見交流、鑑賞など)、スライドで資料作成など ⑤月曜朝に全校朝読の時間を設定。おうちで読書などの取組や巡回指導員、読み聞かせボランティアの活用、図書委員会による図書館まつり 【(児童)読書に進んで取り組んでいるか。67→70】 ⑥1年:芋ほりや制作の補助など 2年:町探検の付き添い、図工の補助 3年:校外学習の付き添い、書写の補助 4年:図工の補助 5年6年:算数、家庭科の補助 ⑦[(保護者)家庭学習の習慣が身についている:79→76]	2	【学びの基盤づくり】 ◎概ね達成できている。高学年、中学校以降の土台となる基礎的・基本的な知識と技能の定着を意識してほしい。 ◎年度で検討して作成した教材の共有による工夫した授業づくり。 ◎聴きあうことを大切にしながら、聴く力の向上と学習内容の定着。 ◎学習規律や聴き方・話し方等の4月の提案による、全学年での成果の積み上げ。 ◎ノートやICT端末を活用した「書く」活動の繰り返しによって、自分の考えを書くことに対する抵抗感の減少。 ◎約9割弱の児童が「勉強はわかる」と回答。授業改善の成果がみられる。引き続き、子どもたちが「わかる」と実感できるように、実践を続けていく。 ▲「進んで発表する」に関しては、挙手することを発表ととらえている可能性がある。端末を通しての交流も発表(伝え合い)であることを伝え、価値づけ。 【全国学力学習状況調査・みえスタディ・チェック】 ◎ICT端末を活用した計算練習による、基礎的な計算力の向上。 ◎夏休みに校内研修で学力調査やみえスタディ・チェックの分析をもとに改善点について話し合った。研究授業や各学年・クラスの実践に有効であった。 ▲(弱み)算数:算数用語を使って自分の考えを記述すること。国語:必要な情報を選択し、条件に合わせて「書く」こと。 【主体的・対話的で深い学びのある授業づくりに向けた校内研修】 ◎授業公開における成果と課題がより良い実践につながった。 ◎スライドで実践を交流でき、学ぶことが多かった。 【ICTの活用】 ◎日常的な活用で、多くの児童が抵抗感なく使用している。高学年ではほとんどの児童が表を見ずにローマ字入力をする事ができている。 ◎授業中に児童が互いの考えを伝え合ったり、他者参照をしたりするときに活用した。学習内容への理解を深めたり、自分の考えを広げたりすることができた。 ◎書くことに課題がある子どもにとって、デジタル教材を使うことで意欲を高めたり苦手意識を減らしたりすることができた。 ▲ICTは自動で変換されてしまうので、手書きの時の誤字が多くなった。目的に応じて、手書きする機会も確保していく。 【読書の推進】 ◎毎週月曜日朝の「全校読書」、お家で読書→読書時間の確保。 ◎読み聞かせや並行読書、図書委員会による図書館まつり、読書ゆうびん。 ◎ボランティア、巡回指導員と連携した読書環境の整備。 ◎学習にかかわる本を各学年に貸し出していることで、読書や授業での活用につながっている。 ◎貸し出し冊数の提示により、本を借りることを意識できるようになった。 ▲主体的な読書につながっていない。家庭との連携して読書習慣をつけることが必要。 ▲読書は好きでも、時間を作るのが難しくなっているのではないかな。 ▲4年生からは図書の時間がないので、積極的に図書館と子どもをつなぐ機会を設定する。 【家庭学習の充実】 ◎漢字や計算の練習だけでなく、ICTを活用した予習型の課題を出している。家庭で事前に課題に取り組むことで、授業では従来よりも深い話し合いや学び合いができるようになった。 ▲一律の宿題内容では取り組みやすい児童もいることを考慮し、それぞれに合わせた課題を出すなど、工夫する。 ▲端末の持ち帰りに関わって、児童が意欲的に学習に取り組めるような内容になるよう、引き続き工夫する必要がある。 ▲家庭学習に取り組む意味や学習の積み上げの重要性を児童に伝えていく。家庭での学習が学校での学びに活かすことができた、と児童が実感できるようにする。また保護者との連携を図る。	【学習・学力向上】 ・「概ね達成できている。高学年、中学校以降の土台となる基礎的・基本的な知識と技能の定着を意識してほしい。」 ・達成状況を見ると、昨年から今年にかけて改善している数字もあり、試行錯誤していることが伝わってくる。 ・なぜ?どうして?と考え方を大切にする授業を展開してほしい。 ・できた、わかったという成功体験が積める、主体的・協動的な授業を展開してほしい。 ・クイズ形式で算数の問題が掲示されており、児童が楽しみながら取り組んでいる。他の教科にも広げてほしい。 ・1年生でカタカナ学習をポケモンリリルで取り組んでいた。キャラクターや自分の好きなもので学ぶことはやる気アップに繋がると感じた。 ・6年生で書道でお正月を思わせる効果的なBGMが流れ、しっとりした雰囲気できちんと取り組んでいた。季節感や空気感、日本の文化などを五感で感じられてよかった。季節の匂い、風の冷たさ、音などを感じる感性が育つことで、表現力が豊かになり、絵本を読む楽しさにも繋がると感じた。 ・家庭学習の定着の取組に期待したい。家庭では、「勉強しなさい」より、頑張ったねの言葉掛けをしてほしい。 ・宿題などの学習活動は生活習慣の定着ややり遂げる力に繋がる一方で、関係性が十分に築かれる前に進められると、本人が「やらされている」と感じやすく、学力や主体性に繋がりにくい場合があるのではないかと感じています。その過程で学習への苦手意識や自己評価への影響が表面化する前の段階にも目を向けながら、主体性が自然と表れてくるための「安心な環境」あり方について問い直し、大人同士で具体化、共有するとともにそのかわりが子どもにとってどのように受け止められているかを振り返り、評価していくことが大切だと思います。 ・安心して学べる学級づくり、友達関係を。先生の声掛けで学校が楽しくなります。 ・子どもも苦手な部分を繰り返し学習していく仕組みがあるとよい。自分に合ったプリントを選んで学習できるとよい。 ・授業の様子では児童は楽しみながら活動をおこなえていたので、このままコミュニケーション能力の向上につとめてほしい。 【ICT】 ・家庭科や体育など、言葉だけでは説明しにくいことも、動画で学習できるのは時間短縮や安全面の配慮にも良いと感じた。 ・新しいツールとして活用する姿も見られたが、持ち帰りで学習以外の使用(ゲーム等)もあり困ることがある。 【読書】 ・家庭での読書が増えるのは良いこと。保護者にも理解が広がるとよい。読み聞かせは、普段自分が手に取らないジャンルの本に触れ合える良い機会だと思う。 ・図書館まつりでたくさんの児童が本に触れたのはよかった。今後の読書の広がりにつなげたい。 ・図書の時間に本の分類や並び方なども全学年で学習すると、配架も丁寧になる。 【行事】 ・授業参観は午前中フリー参観とするなど、個々の事情に配慮して復活できないかな。(担任以外の授業を見たいという声も)	・みえ・スタディチェック、学調で弱みの確認された「書く」、語彙力向上について、継続して取り組んでいく。 ・ペアやグループ活動を積極的に取り入れ、学びあい、表現する力をつけていく。 ・「読む書くワークシート」などの活用、読書の推進などで読解力の向上に努める。 ・主体的、協動的な授業展開になるよう試行錯誤して実践を積み重ね、共有し、研修を深める。 ・児童に必要な学力を身に付けさせることができるよう、学校全体で方向性を共有し、校内研修を進める。 ・家庭学習に関しては、児童に宿題の意義を伝えるとともに、「宿題をしているから力がついてきた」と実感できるようにする。 ・学校での学習状況や置きやすい単元であることなどを通信で伝え、家庭学習の重要性を啓発し、家庭との連携を図る。 ・宿題等の家庭学習を進める際に、児童各々の学びにつながる家庭学習になるようICT機器の活用も含む課題設定の工夫を行う。(予習型など) ・授業中集中が途切れがちな児童や複雑な家庭背景をもつ児童等への学力保障に向け、一人ひとりの生活背景等を踏まえた取組を検討する。 ・図書委員会の取り組みも含め、日常的に読書に親しみ、読書週間に付けられるような取り組みや声かけを、今後も継続していく。
	⑧ 出前授業・校外学習等の外部人材の活用(各学年1回以上)	(1年)JA(苗植えの指導) (2年)地域の施設・会社(三重軌軌、八幡神社、随順寺、R-cafe、虎屋勝月見学)・EAS・野菜植えの指導(JA) (3年)マックス・パティ・鈴鹿餅屋店見学・春のくらし・環境学習 (4年)社会福祉協議会(アロマ教室・車いす体験) (5年)(鈴鹿市子ども多事例) (6年)租税教室、馬術学習(キャリア教育)、人権センターより(人権学習)	2	【学習支援ボランティア】 ◎地域コーディネーターと連携することで、安心安全で効果的な学習活動を進めることができた。 ◎学級担任は、ボランティアの支援があることで児童と関わる時間を生み出すことができた。 ◎三重県地球温暖化防止活動推進員を招聘して、環境学習を実施予定(3月)	・いろいろなことに興味をもって視野を広げたいという面でも継続して取り組んでいてほしい。 ・体験学習や外部人材を活用した授業など子どもが生き生きとくわいてくわえていくような良い道しるべなど。 ・地域にも良い人材や良い施設も多い。地域との交流も大切にしたい。 ・例えば、昔の道具など、映像だけでなく、実物を地域の方に見せていただくような体験授業ができればなおよい。 ・学校外の方でも地域や社会のことを学んだり、体験したりできるのは良い。家に帰ってからよい話題になる。 ・たくさんさんの職業の人と出合い、興味を持ててほしい。興味のある職業から、将来や進学先など意識できるとよい。 ・低学年の校外学習や社会見学に限らず、地域や鈴鹿の企業や地元の施設との学習をもっと増やせないかな。教材として地域をさらに開発して飯野の良さを、先生・児童共に知ってもらえとよい。	・引き続き、学習支援ボランティアの活用や地域教材の発掘、地域人材との連携等外部人材の活用を推進していく。 ・授業等を受け入れていただける企業・団体・商店等の新規開拓を続けていく。
愛の教育(人権教育・特別支援教育・心の教育)	① 自尊感情(非認知能力)を高めるための仲間づくり(自分にはよいところがある:85%以上) ② 人権学習の取組、道徳の実践研究(研究授業の実施)	(児童アンケートの実施) ・「自分には良いところがある」に「はい」または「どちらかといえばはい」を答えた児童:86%→89% (研究授業の実施) ・11月 2年生・4年生の授業研究(校内) ・11月 6年生の授業研究(創徳中学校区人権授業実践研究) (職員研修の実施) ・校内研修会「絡る活動や語り合う活動を中心に据えたなかまづくり」(教科書無償貸付のお話(愛の部会)) ・校内研修会「絡る活動にどのようにとらえようか」(鈴鹿市人権教育センター) ・校内研修会「すべての学校で部活問題の解決に向けた教育を」(通級指導教室の役割(愛の部会)) ・7月 人権レポート研修会(鈴鹿市人権教育センター) ・1月 人権レポート研修会(愛の部会)	2	〈研究授業〉 ◎指導案検討を重ねていくことで、課題をとらえなおしたり、子どもに育んでいきたい力を見つめなおしたりすることができた。また、様々な視点で授業について考えることで、子どもの見方をとらえなおしたり、よりよい取組にしていけるために大切なことが明らかになったりした。 ▲絡る活動や語り合う活動を授業にどのように活かしていくのが、研修を深めていきたい。 (人権レポート研修会) ◎子どもとの実態を具体的に把握していくなかで、課題が明らかになった。その課題を解決するための実践をふりかえることにより、子どもの見方をとらえなおすと、自らの実践力を高めることができた。 ▲より一層、教師自身が自らの人権意識と真摯に向き合い、変容していくための研修にしていきたい。 (人権学習の取組) ◎各学年の取組を横断的にまとめ、ギャラリーの掲示板(ほかほか広場)で紹介した。様々な取組が子どもにわかりやすいように視覚化されており、足を止めて見ている子どもや保護者の姿も見られた。 ▲各学年の人権教育カリキュラムを活用して、6年間の人権学習に系統性をもたせたい。	・一人ひとりの成長のスピードが違ったり、考え方が違うのを見るのが楽しい。現在の自分を分析しながらすくすく成長してほしい。 ・一人ひとりが認められ、居場所のある学級・学校づくりをしてほしい。他と比べるのではなく、成長をみつめることが愛の教育だと思う。 ・いじめや差別を許さない、見逃さない態度を子どもたちにつけてほしい。 ・学年間、学級間で差のない、6年間を見通した系統性のあるカリキュラムを確立してほしい。 ・学校内だけで問題を抱え込まず、必要に応じて地域の人材活用、協力を図っていただきたい。 ・ギャラリーの掲示ポスターには、児童が関わったものがたくさんあるのがよい。来校者にも関心をもってもらえる。外国語の掲示ポスターも良かった。	・多様性を認め合い、自分らしく生きることのできる児童の育成に励んでいきたい。 ・一人一人が安心して学校生活を送ることができるように、児童の思いや願いを大切にしながら取組を進めていきたい。 ・絡る活動をおとして自分自身を見つめなおす力を育んだり、語り合う活動をおとして反差的の思いでつながるなかまを目指していただきたい。 ・人権教育カリキュラムを効果的に活用して、計画的・系統的に人権学習を進めていきたい。
	③ いじめ等の問題行動への迅速かつ適切な対応 ④ 不登校傾向児童への初期対応、自立支援の充実	(いじめ等の問題行動への対応) ・いじめアンケートの実施 ・わかばやわかばく教室、ほっとルームとの連携 ・児童の情報共有 (不登校傾向児童への初期対応、自立支援の充実) ・教室に入りづらい児童について、わかばやわかばく教室、保健室、ほっとルームなどに対応し、子どもたちの居場所を確保する。 ・スクールカウンセラーが年間15回来校して、保護者や児童(計24名)の面談や児童観察をする。(12月時点) ・30日以上欠席の児童数 昨年度より減少(31名→25名)。(12月時点)	2	【いじめ等の問題行動への対応・不登校傾向児童への対応】 ◎不登校傾向にある児童の状況を確認できる資料を活用して、情報共有をすることができた。 ◎情報を共有するだけではなく、具体的にどのように支援していくか話し合う機会を定期的に持つことができた。 ◎学級や学年で起きた事象について、学年だけでなく学校でも情報共有をしておいていくことができた。 ◎カウンセリングの日程を便り等で定期的に知らせることで、カウンセリングの申し込みが増えた。悩みを抱えている児童や不登校傾向にある児童の保護者をSC(スクールカウンセラー)につなぐことで、教師以外にも相談窓口を作ることができた。 ◎教育支援課や子ども家庭支援課、SSW(スクールソーシャルワーカー)、SCなど、関係機関と連携を図りながら、多角的な視点で児童の支援方法を検討することができた。 ◎30日以上欠席の児童数が昨年度より減少した。 ◎わかばやほっとルームの教室があることで、出席日数が増えた児童がいた。 ▲教職員が連携して支援することで、欠席が続いていた児童が再び登校したり、教室で過ごすことができるようになったりしたが、欠席が続いている児童もいる。	・できたことも多く、熱心に取り組めたことがうかがえた。 ・虐待、いじめ、不登校への対策は組織的に行う必要がある。早期発見と対応が解決への糸口となる。報告・連絡・相談をしっかりとし教師集団のまとまりで克服していかしてほしい。 ・必要に応じて地域の人材を活用・協力を図っていただきたい。 ・子どもとの困り感や担任の先生に相談してうまく解決することができた。 ・自分では解決できないとき、相談しやすい環境はありがたい。 ・職員同士の情報共有は大事だと思う。 ・児童を見守り、寄り添える場所があり、効果も上がっていることは学校にとっても良いことである。 ・これまでの取り組みを継続して取り組んでいただきたい。 ・相手に自分の気持ちを伝えたり、SOSを出したりすることが苦手な児童もいると思う。そのような子の困り感を早期に発見するため、児童と担任のコミュニケーションも大切にしたい。 ・小さな変化に気づいていただければありがたい。 ・将来的に、教室で過ごせる時間を増やすため、また気持ちを落ち着けて教室に戻るためにほっとルームの活用は良い。登校できているという自信にもなる。	・職員間の情報共有(報告、連絡、相談)をしっかりと行い、いじめ、不登校への組織的な対応を進める。 ・月1～2回のSCによる相談のほか、各担任や特別支援コーディネーター・通級担当・養護等が連携して児童を見守り、必要に応じて相談を行う体制を整えていく。 ・各担任や特別支援コーディネーター・通級担当・養護・SLS等の職員で連携し、教室に入りづらい児童や不登校傾向の児童への支援を継続する。 ・わかばやほっとルームのさらなる活用を進める。 ・子ども家庭支援課や教育支援課等の関係機関や、SSW等との連携を進める。
愛の教育(人権教育・特別支援教育・心の教育)	⑤ 特別に支援が必要な児童の個別的教育支援計画等の作成(100%) ⑥ 児童の発達や養育の課題等について、関係機関と連携した支援会議等の開催 ⑦ 外国籍児童への個別に合った日本語指導	(支援ファイルの作成) ・個別相談等と保護者と情報共有し、今後の指導に活かすようにする。 ・特別支援学級に在籍児童や通級児童を含め支援を必要とする児童の支援ファイル作成:100% (支援会議の開催) ・学年単位の支援会議やケース会議を開催する。 ・支援会議は年間通して26回行われた。支援会議は新入児12名、卒業生9名が行われる予定。(12月時点) (特別支援教育の推進) ・特別支援学級児童の理解と支援方法についての研修会 ・通級指導教室が果たす役割についての研修会 ・通級指導教室「わかばく教室」、特別支援学級「ひまわり教室」の紹介(1年生) (外国籍児童への個別に合った指導) ・バンドスケールの実施と個別の指導計画の作成 ・国際教室・スマイルとの連携 (多文化共生教育の推進) ・多文化共生社会の実現に向けた取組について理解を深める学習	2	〈支援ファイルの作成・支援会議の開催〉 ◎支援が必要な児童のファイル作成に取り組むことができ、職員間で子どもについての情報を共有することができた。 ◎特別支援学級籍の児童数が増えているが、協力学級担任との会議を開催することで、情報交換・情報共有をすることができた。 ◎特別支援教育コーディネーターと担任が情報共有を図りながら、対応や支援について考えることができた。 ▲日常の情報共有の時間や有効な支援が行える人員の確保が課題である。 (外国籍児童への個別に合った日本語指導) ◎国際教室への対応に児童について、担当者や担任が連絡ノートを使って情報共有をし、支援の仕方などを共有することができた。 ◎国際教室でその子に応じた授業を行い、子どもたちに日本語や計算力がついてきた。 (多文化共生教育の推進) ◎2年生がEAS訪問での学び、5年生が社会見学(野上民族博物館・リトルワールド)での学びを活かして取組を進めた。外国の習慣や文化についての学習にとどまらず、外国につながる方(友達)の思いや願いに耳を傾けていくことで、共に生きていくために大切なことことを考えることができた。 ◎情報・掲示委員会で、世界の国々についてまとめた掲示物を作成することで様々な文化を発信することができた。	・支援ファイルの作成と引継ぎは大切。全職員での情報共有の大切さは毎年言われている。忙しいとは思いますが、確実に確認・引継ぎのできる工夫や時間の確保をしていただくとうい。 ・特別支援学級に行くことでも良い表情で出迎えてくれる。毎回参観のたびに成長を感じる。 ・特別支援学級では、ほぼ学年別で細かな指導ができ、児童のできること・学力などの活動力はアップしていると感じる。 ・支援の必要な児童が通常学級で授業を受けていた時、落ち着かなくなってきたときも、先生が冷静に対応して気持ちを落ち着けている様子もありよかった。 ・連絡帳で丁寧に学校の様子を伝えて頂いている。良いことも悪いこともあるが、内容を知り、子どもを思いっきり褒めたり、正しい方向に導く話も家できている。情報共有があるので、放課後等ティチャーにも伝えることができる。先生方に感謝です。 ・昨年度クラスに入れない子どもが楽しく皆と活動している姿が見られて嬉しかった。特別支援学級の児童を子どもたち同士でサポート、フォローする姿があつて良かった。 ・支援ファイルをもとに子どもの様子に応じて支援内容の見直しや共有を細やかにしていただければありがたい。 ・鈴鹿市は多国籍である。現任も多くの職場で外国の方と仕事をする。言葉は通じなくても意志は通じるし仕事はできる。スマートフォンで翻訳もできる。子どもたちの将来に活かしていけるとよい。 ・就学時健診の負担。専門的な指導助言を少しでも早期発見や早期対応に繋がりがりやすくなることを期待して、自治体主体で実施してほしい。	・支援ファイルは保護者と共有し、次年度に向けて確実に引継ぎを行う。 ・支援ファイルを活用し、保幼小中だけでなく、高等学校等や就労も踏まえた「途切れのない支援」につながるよう取組を継続する。 ・特別支援学級や通級指導教室の取組について、児童・保護者へのさらなる周知を進める。

評価項目	本年度の活動と指標	達成状況【アンケート6.12→R7.12】	評価	(R7) 成果と課題(◎成果、▲課題)	(R7) 学校関係者評価	(R7) 来年度に向けた改善点
(体力向上・命の健康教育・安全)	① 体力向上をめざす活動の推進(全年身体力テスト実施)	・全年身体力テストの実施結果の分析 【強み】男子はすべての種目で全国平均(50点)を超えている。特に、立ち幅跳びは53.5(+3.5)、垂力は53.1(+3.1)、反復横跳びは53.0(+3.0)と比較的高い得点になっている。 【弱み】女子はほとんどの種目で全国平均(50点)を下回っている。特に、50m走46.0(−4.0)、シャトルラン47.2(−2.8)、上体起こしは47.3(−2.7) →①全身持久力が低い。走り続ける運動や遊びを行う機会が少ないことが原因だと考えられる。 →②走るスピードが遅い。全力で走る機会が少ないことが原因だと考えられる。 →③基礎的な筋力が低い。体感を使う運動や姿勢、遊びが少ないこと、腹筋運動そのものをやったことのないことが原因だと考えられる。	2	【体力テスト】 ◎動きのコツを見つけながら、体力テストを行うことができた。 ◎年齢相応記録を参考に、目標をもって取り組むことができた。 【水泳指導】 ◎研修などを行うことで水泳指導を安全に行うことができた。 ◎6年生で着衣水泳を体験することができた。 ▲教員の数や時数のこともあり、泳げなかった子を泳げるようする指導は難しかった。これからは特に身の安全を守るために「浮く」指導を大切にしていきたい。 【持久走】 ◎各クラスで目標を決めて取り組むことで、意欲的な活動になった。	・体力面・健康面・安全面での課題から具体的な改善策を立てて、実行してほしい。・命と性の教育、平和教育は未来の子ともたちの育成にとって必要。継続してほしい。・水泳も数的には少ななかったができたことは良かった。気温や天候に大きく左右されるがもう少し授業数を増やせるとういように感じた。・泳力よりも水の怖さやライフジャケットの有効性、助けの呼び方など、水難訓練を今後も大切に指導してもらえるとありがたい。・子どもの体や成長に合わせて体力や持久力をつけていきたい。・楽しく体を動かせるとよい。・まずは家庭とも連携して生活習慣の向上を図り、早寝・早起き・朝ごはんで体の抵抗力を上げていきたい。・体力低下やけが防止に向けて、1年間を通しての目標に意識して取り組んでほしい。・個人の能力差もある。一人ひとりが自分の目標をもって少しずつでも達成できるとよい。また、自己分析につけられるとともに良いのではないかと。・命の教育の観点からも学力や成果を評価すること以上に、子どもが安心して失敗でき、自分の存在を肯定できる環境の中での経験、居場所だと感じられるような日々の積み重ねが命を大切に感じる感覚や生きる力に繋がってくのではないかと考えます。性教育や人権教育では外部講師に来てもらうのはどうか。・子どもたちの遊びの時間が以前より減っているように感じています。休憩時間に宿題や課題に取り組んでいると聞いたことがあり、遊びの時間、切り替えの時間を意識的に確保していく視点が大切だと思います。・最近ではスポーツレジャーを育成したり、体の使い方やケアが進んでいる。学年に応じて、楽しみながら活動できる工夫をお願いしたい。・避難訓練、不審者対応、引渡し訓練、交通安全教室等、形式的に終わることのないように工夫してほしい。・防災は学校だけでは限界がある。家族や地域と一緒に防災、安全について話し合い、考え、行動する機会を地域づくり協議会と実施していただきたい。	・日常の体育の授業の中で、「走る運動」や「腹筋を使う運動」などの様々な動きができる活動を取り入れていく。具体的には体育の授業の最初や最後の30秒を全力で走る活動、動物歩き、手押し車など全身の筋力を高め、体幹を鍛える動きを入れる。また、遊びの要素を取り入れて、楽しさを感じられるように指導を進めていく。 ・着衣水泳などを含めた水泳指導を充実していく。
	② 自他の命を尊重する「命の教育」を計画的に実施 交通安全教室、防災・引き渡し・不審者対応訓練、防犯教室 ③ 食育の授業及び食物アレルギー対応研修の実施	・ネットトラブル防止教室(3~4年) ・方引き防止教室(1~5年) ・不審者対応学習の実施。 ・交通安全教室(1・3・5・6年)、交通安全指導の実施。 ・すくすくパトロールへの職員の参加。 ・食育教諭と連携した食育の授業の実施。 ・食物アレルギー対応の研修と、情報共有。	2	【ネットトラブル防止】 ◎教育支援課によるネットトラブル教室を実施し、子どもたちはよく納得した様子だった。 ▲携帯電話会社による講話は、担当の人員が減ったことで今年度は実施できなかった。来年度は携帯電話会社による講話も実施していきたい。 【不審者対応】 ◎教職員を対象とした不審者対応訓練を実施することができた。 ◎児童を対象とした不審者対応訓練は実施できなかったで、来年度以降実施したい。 ▲不審者対応用の用具も整えていきたい。 【交通安全指導】 ◎交通安全教室を通して子どもたちに意識づけすることができた。 ◎夏休み前に方引き防止教室を行うことで、夏休みの生活につなげて考えることができた。 【登下校】 ▲登校中、登校班での困りごとが多数ある。引き続き指導していく必要がある。 ◎すくすくパトロールは子どもや保護者、地域に対する安全・注意喚起の機会となった。 【食育】 ◎子どもの状態やアレルギー対応などの情報をその都度職員全員で確認することができた。 ◎家庭科での既習事項や、その日の給食を用いて食育をおこなうことで、意欲的に授業ができた。	【安全】 ・もしもの時に知らないことや不安があると正しい判断ができないことや判断に迷うこともあると思う。このような活動を今後増やしていけるとよい。・南海トラフに関するニュースも増えてきている。様々な訓練を参観日等に行い、家族や地域と一緒に考え、話し合う機会をつくれるとよい。校区としての意識向上も図りたい。・今年、着衣泳を6年生で行うことができたのは良かった。今後も続けていきたいほしい。・災害はもちろん凶悪な事件犯罪も多い。各方面の協力を得て、取り組んでいきたい。 【登下校・交通安全】 ・登校時は整然としているが、下校時には安全に対する集中力が欠けている。特に低学年が交通事故に遭わないか心配である。(信号無視で道路横断を見かけた)・飯野小は保護者による車での送迎が多いと聞く。集団登下校できるように学校、家庭で共に努力してほしい。・危なく周りに迷惑をかける歩き方をしている子がいるとよく耳にする。学校だけでなく、家庭でも保護者と子どもで散歩しながら交通安全やルールに関する話ができるとうい。・学校・地区委員でそれぞれ注意をしているが改善されない児童もいるという話を聞く。難しい個々の保護者とも連携をとれるとうい。・自転車の安全教室は必要だと思う。ヘルメットをかぶらない児童も見かける。低学年からの指導が大切だと思う。	・ネットでのトラブルをより詳しく学んでいくために、外部講師の方を呼んだ教室を実施していきたい。 ・学校全体での不審者対応の訓練が実施できるように計画していく。 ・登下校中の指導は地域・家庭の協力がないとやっていけないため、登校中の子どもたちの様子を知ってもらえるよう、地域・家庭に発信していく。 ・地震が起きることを想定した、さまざまなパターンでの避難訓練を行っていきたい。
(基本的根っ生活の習慣の確立)	① 基本的生活習慣(非認知能力)の定着(テレビやゲームやスマホの時間を決める:80%以上) ② 安心して、生き生きとした生活が送れるようにする(学校が楽しい:90%以上) ③ 規範意識(非認知能力)の定着(チャイムを守って行動する:90%以上) 重点5 保護者・地域との連携強化(地域とともにある学校)	児ア)学校が楽しいか。89%→89% 児ア)チャイムを守れたか。92%→93% 児ア)テレビやゲームの時間を決めて使っているか。74%→68% ・生活チェックシートの活用。 ・生活のきまりを常に教室に掲示し、何かあれば子どもたちと確認することができた。 ・いじめアンケートの結果を学校内の関係者会議で話し合った。「いじめられている」と書いてきた子の情報を学年で話し合い、対応できた。	2	【生活チェックシート】 ◎生活チェックシートを活用して、子どもたちに生活リズムのことを意識付けできた。 ▲各家庭によって取組が様々で指導が難しい。生活リズムのことは学校でどれだけ話しても家庭の協力が不可欠である。 【アウトメディア】 ◎メディアとの向き合い方を保護者へ啓発するために、スマートフォンの家庭での約束の例の資料を個別懇談会で配布した。また、外部講師(すずか子ともクリニック)を呼び、保護者向けの講演会を実施した。 ▲夜遅くまでゲームやSNSをしている子が多数いる。その中で、ネット依存やスマホ依存、ゲーム依存になっており、自分でコントロールすることが難しい児童もいる。なかなか改善できていないのが現状である。 →メディアにかかわる目標時間を各学年設定して取り組んでいきたい。 【いじめ対応】 ◎トラブルが起きた時に、学年、管理職で情報共有し、組織的に対応することができた。 ◎他の学年でおきた事案も迅速に情報共有するよう努めた。	【ネットトラブル】 ・スマートフォンを持つ子も多く、低年齢化してきている。ネットトラブルに関する授業や講習をしてもらえるのはありがたい。保護者も一緒に学べるとよい。 ・スマートフォンの使用とその影響について保護者も勉強機会があるとよい・生活チェックシートでの振り返りは大切。教員・家庭・地域で目標を設定できるとよい。 ・基本的な生活習慣や事の善悪・規範意識など、理解はしているが実行できない大人や子どもが年々増えてきているように感じる。基本的な生活習慣の確立が最重要課題である。 ・生活チェックや宿題の確認に関われない保護者もいる。担任と児童とのコミュニケーションの他、他の教師との連携も同時に行っていく必要がある。 ・SNSやゲームは保護者の協力が必要。意識づけるのためにも親子で話し合いができるとよい。啓発をしっかりしていきたい。 ・家庭の教育力は重要。学校、家庭でもネットやゲームと接しない時間を強制的に設定する必要もあるのかもしれない。ただ、家庭の生活リズムや生活スタイルによって就寝時刻が遅くなり、アウトメディアが難しい家庭もある。 ・子どもとネット環境の見直しが話題になっている。使い方の変換期なのかもしれない。 ・学校が楽しい、友だちに会えることが嬉しいというのは喜ばしいこと。 ・ゲームを使っているコミュニケーションもあるがそのせいで学習の時間や睡眠時間が減るのは問題。ゲームやパソコンによる視力の低下も気になる。 ・スマートフォンやゲームの使用に関しては家庭の教育力が大きく影響する。最近ではネットゲームからのトラブルも増えている。保護者が子どものSNSのやり取りを知らず問題が広がることもある。	・生活チェックシートの振り返りを充実させていく。また、担任が子どもの状態を知ることでしっかりとコミュニケーションをとっていきたい。 ・アウトメディアの取組について、中学校区で統一した取組を引き続き行っていく。また、ゲームやインターネットの悪影響も含め、ネットモラルの指導を充実させていく。 ・メディアによる悪影響を保護者の方に理解をしていただくために、小学校入学前(入学説明会など)で保護者向けの講演を実施していきたい。
	○あいつつ運動の実施	児ア)あいつつができたか。88%→90%	2	◎あいつつを返す子が増えた。教室に入ると時、大きな声であいつつをする姿も見られる。 ▲自分からあいつつをする子はまだまだ少ない。 ▲大人にはあいつつができて、子ども同士であいつつをできる子が少ない。 →あいつつの大切さ・気持ちよさを継続的に指導していく。	・あいつつすることで、人を認め、大切にできる気持ちが生まれることに気づけるように継続して指導してほしい。・以前に比べるとあいつつする子が増えてきている。あいつつの気持ちよさを感じる児童が増えていくとよい。・大人のあいつつも少なく感じる。まずは大人の見本から変えていくことも大切。家族間でのあいつつも意識していけるとよい。 ・アンケートで90%の数値があるが、実際には自分からあいつつ出ている児童はもっと少ないように感じる。地区や登校班によって違いがあるのかもしれないが、こちらがあいつつをしても返ってこない児童の方が多く感じている。大きな声で元気にあいつつ出来る子はまれ。・廊下や教室、運動場に落ちているゴミが減った。・忘れ物や紛失のある児童が多くなる。生活の基本である整理整頓や自己管理が大事。・委員会などで欠席者の代わりとして助け合って仕事をしている姿がみられた。	・学校では教員を中心にあいつつをしていく。あいつつの気持ち良い声が広がるように雰囲気をつくっていく。 ・代表委員会などを中心に「あいつつ運動」などを実施し、児童があいつつする良さに気づけるようにしていきたい。
保護者・地域との連携強化	① 飯野小学校運営協議会の発案と創徳中学校区拡大学校運営協議会の実施(計5回) ② 保育所(園)・幼稚園・中学校等と、地域関連施設との連携・交流 ③ 児童(6・12月実施)・保護者(12月)アンケートの実施(分析結果の活用) ④ 飯野教育協議会「すくすくパトロール」の実施(原則月2回) ⑤ 「学校だより」やホームページを通して家庭や地域に発信(学校は通信やHPで伝えている:保護者評価95%以上)	①②学校運営協議会は予定通り実施。幼稚園・中学校ともに連絡を取りあい、中学校区の学校運営協議会も開催できた。必要に応じて幼小中にて随時会議を行っている。 ③・児童アンケート(6月・11月)保護者アンケート(12月)実施 ④基本予定通り実施(雨天中止あり) ⑤「学校だより」の定期的な発行(22号:12月23日発行) 【(保護者)学校は地域との連携を大切に教育活動を行っていますか。97.6%→97.6%】 【(保護者)学校は通信やHPで伝えているか。95.8%→95.7%】	2	【児童・保護者アンケート】 ◎6、11月に実施。一昨年度より、実施方法をフォーム(オンライン)に変更。結果を分析し、成果と課題等を明らかにし、全職員で内容を共有し、学校運営に反映。 【相談・通信】 ◎学校だよりは昨年度とほぼ同じ号数。保護者向けには「きずなネット」によるメール配信で、よりデジタル化を進めている。 ◎「きずなネット」では、連絡事項にとどまらず、少しでも学校の様子を知っていただくために、メッセージ性のある掲載を意識している。 ◎子育て等において心配や相談のある保護者に対し、積極的に面談を実施し、担任だけでなく、学年主任や特別支援教育コーディネーター、教頭が同席し、支援会議を実施。また、必要に応じてスクールカウンセラー(SC)のカウンセリングを受けられるように勧めたり、SSWや関係機関を積極的に活用。 ◎学校だより、学年・学級だより、学校HPによる発信を積極的に行った。	・学校だよりなどの通信の活用で保護者や地域との連携が増しているのは評価できる。地域でも学校の活動が理解してもらいやすくてよい。・学校だよりを自治会にも回覧しているが、学校のことを少しでも知ることによって地域住民もより関心をもって学校を身近に感じてくれる。大変意義はある。 ・参観や行事に保護者の参加できる機会を増やして学校・地域・保護者が一体となった教育活動ができることを今後も期待する。 ・職員、ボランティア、PTA、学校運営協議会、地域でたくさんの協力もある。ありがたい。 ・地域も学校に対して協力的なところが多いのではないかと感じる。	・引き続き、学校だより、学年・学級通信や学校HP等を通して、家庭・地域へ情報発信を行っていく。 ・学校だより等、今後もメール配信を継続する。地域への回覧は紙での配付とする。 ・すくすく拡大委員会議(拡大すくすく)等の場を通して、地域・保護者と校区の安心安全についての情報共有を進めていく。
	① 授業実践及び、改善を継続し、授業力の向上をめざし、積極的な授業公開 ② OJTを通して、授業や学級運営について、気軽に意見が交わらせる職場づくり ③ 学校運営に必要な研修会への積極的な参加 ④ 組織的な生徒指導体制の確立 ⑤ 総勤務時間の縮減 1人当たりの月平均時間外労働30時間以下 年360時間、月45時間を超える時間外労働者の人数0人、定時退校日の退校率95%、休暇取得平均日数23日以上、60分以内に終了する会議 70%以上	・学校経営方針に対する学校運営協議会による承認 ・留守番電話の活用17:30~7:45 ・教科担任制による授業担当の工夫 ・学校運営協議会委員の授業参観、教育活動全般に対する協議 ・ICTを活用することで、会議自体を現在減らせる工夫をしている。 ・定時退校できた職員 90.3%→94.4%(12月現在) ・生徒指導体制の見直しを行い各学年ごとの連携と報連相の徹底を図った。	2	【学校運営協議会】 ◎活発な協議が行われた。行事関係を中心に学校運営に向けても、様々な意見をいただいた。協議内容は後日全職員に伝え、学校運営に生かした。 【地域との連携強化】 ◎創徳中学校区で保・幼・小・中の交流会を実施。また児童観察のための保・幼訪問も積極的に行った。 【総勤務時間縮減】 ◎業務支援員、SSS(スクール・サポートスタッフ)等の活用が進み、職員の業務量の削減が進んだ。過重労働時間も年々大きく削減できている。 ▲改善傾向にはあるものの、学校行事に関わる計画と準備、学校外でのトラブル対応、保護者対応等により、総勤務時間の縮減に向けては厳しい状況である。家庭に持ち帰りの仕事もまだまだ多い。	・運営協議会の参観は学校の力を注いだところ、見てほしいところ、評価してほしいところなどを参観できるとよい。 ・若い委員、若い教員が増えて生き生きとしている。時代の変化も早いので新しいことを知っている若い方の意見は必要。専門性が必要な授業や活動は積極的に外部人材を活用してほしい。 ・運営協議会は参観が大半を占めているので対話の時間が少なく感じました。 ・先生方の負担を少なくするため、PTAとできることがあればしたいと思っています。 ・ボランティア、SSS等の活用をさらに工夫して進めていきたい。 ・体調を崩す職員も多い。健康面に結び付いた環境づくりの工夫も必要。心身ともに体調に気を付けて健康に留意していただきたい。 ・教職員の日常の健康状態の把握を充分にお願いしたい。	・ボランティアが減ってきている現状を踏まえ、勧誘活動を増やしていく。地域へは紙での登録、保護者にはフォームからの登録で、申込方法の手段を複数確保する。 ・入学説明会で実際にボランティア活動をしている方からの呼びかけ(保険適用を含む)を行う予定だったが、当日、体調不良で実施できなかった。 ・SSSや学校ボランティア等を活用し、引き続き総勤務時間の縮減に努めていく。